

〔閑田耕筆<sup>三</sup>〕同<sup>〇</sup>守 和尙備前の下津居より船にて丸龜へ渡る海上、丸龜近くなりて遙むかひに、五尺計なる黒き水尾つくしみゆ、さも深かるべき所に、いかに長き木をうちこみて、かく見ゆる計にやとあやしくて、船頭にとはれしかば、船頭見て、あれは大龜の首を出したる也、空曇なく海のどかなる日はかく首を出し、あるひは全身をも見ず、昔より大小二龜住て、大なるは廿疊敷のほどもあらん、小なるもさのみは劣す、このもの、住るが故に、こゝを丸龜とは名付たりと語りしとぞ。

綠毛龜

〔本朝食鑑<sup>十</sup>蟹〕綠毛龜

釋名、蓑龜。俗稱、此龜出處未詳。

集解、本朝食工所描之龜、皆尾有長毛、是綠毛也、然未知自何國而出者、曾聞阿州海上有大龜、大者方一二丈、其尾毛綠如雲起、傳稱國守繼世而初入州時、大龜必出于海上焉。

〔和漢三才圖會<sup>四十六</sup>〕綠毛龜 綠衣使者 俗云蓑龜<sup>〇</sup>中

按大抵畫工所圖龜、皆有長毛、如綠毛龜、而本朝希有之者也、稱光帝應永廿七年、河州獻綠毛龜、蓋久畜主毛者非也、尋常水龜冬藏泥中、春出時、甲上被藻苔、青綠色、如毛、捕之數撫而不脫、經月則毛落如常。

〔重修本草綱目啓蒙<sup>二十一</sup>〕綠毛龜 ミノガメ<sup>〇</sup>中

本邦ニモ三五寸許ノ大サナルハ、池澤流水中、常龜ト俱ニ群遊ス、形ハ水龜ニ異ナラズ、只甲ニ黄斑アリテ、三寸許ノ長サノ細綠毛多ク生ジ、水中ヲ行ク時ハ、甲後ニ靡キテ尾ノ如シ、今島臺ニ飾ル多毛ノ尾アル龜ハ、此ノ狀ヲ像ルナリ、實ニ尾ニ多毛アル龜アルニ非ズ、海中ニモ亦綠毛龜アリ、

〔本朝世紀〕久安四年閏六月五日辛酉、抑去春頃、<sup>〇</sup>中 青毛龜。一頭自鎮西獻入道相國、<sup>〇</sup>藤原同被獻